

②、スーク・アイバーン山岳地域現地調査 (ジーザン・ベースキャンプにて)

1975年12月22日

ベースキャンプ移動。ナジュランからジーザンへ。

今日は、しかし途中で野営。夜気は相当に冷える。

今朝はいろいろ慌ててしまった。新しいドライバーを雇ったが、決めた時間に実際いくら待っても来なかった。すっぽかされたわけである。

私たちは急いで代わりを探さなければならなかった。私はキャンプ地のそばに住んでいるベドウィンがメルセデスの運転ができるというので急遽交渉して雇った。パーティーはどうか出発の態勢が整い、当初よりの時間よりも少し遅れて、朝9時過ぎにナジュランを出発した。

しかし途中でそのドライバーは全く駄目なことが判明した。彼はメルセデスの運転は不慣れと見え、特にギヤーの切り替えがうまく出来ず何度もギヤーのカリカリという異音を発しながら運転したのである。メカニックの祖父江さんはそれに怒りだし、「これでは車が壊れてしまう」と彼を運転席からひきずり降ろし、彼自身でメルセデスを運転し始めた。

まあ、あわてて雇ったベドウィンなのでうまくいかないのは当然といえば当然。

1975年12月23日

昨日はアブハの検問所の手前で野営した。今日は朝一番でその検問所を通る。車の登録証、各ドライバーの運転免許証を提示。何も問題なく通過することができた。

しかし検問所を通過した後は大きな試練が待っていた。ティハーマ（紅海沿岸地域）へ下るために長く、急峻な、岩だらけのつづら道を通らねばならなかったのである。私はローギヤーを常に入れながら慎重にハンドルを切り、ゆっくり下った。ブレーキペダルにあまり足を置きつづけないようにと分かっているが、つい足がそこにいつてしまう。脇の下方を見ると絶壁。目が眩む。時々上から小石がごろごろ落ちてくる。後ろの車が弾き飛ばした石だ。また自分の車のタイヤも小石を弾き飛ばし車体にガンガン当る。所々幅1mほどの岩が転がっている。慎重に避ける。また轍がかなりえぐれているところもあり、そこを小川となってちょろちょろ水が流れ落ちていた。どのくらいの数のS字カーブを通過したのだろうか。私はどうにか降りきることができた。下の舗装道路に出たときは本当に安堵の気持ちで胸を撫で下ろした。

下り終わった車から道路の脇に停まって次々と降りてくる車を待っていた。全車無事下り終わるのに1時間もかかったろうか。私たちは何事もなかったかのように隊列を建て直し、整然と舗装道路を進んでいった。

下界は、湿気が多く体にべっとりと絡みつくような猛烈な暑さ。ここがティハーマだ。

1975年12月24日

昨日の野営地から1時間半くらい走ったところで、ようやくベースキャンプ地として適当な所を見つけた。ジーザンより北東に45キロほど行った舗装道路沿いの平坦地。そこは、元は飛行場であったとかいう話で広々として、また土もしっかりと固く絶好のキャンプ地である。

ジーザンはさすがに暑い。日中の暑さは、今が一年で一番過ごしやすいというのにじんじんするような暑さで、頭がくらくらした。これから紅海の海岸線一帯でこの調子が続くのかと思うと先が思いやられる。

1975年12月27日

ジーザンのアミールへ挨拶に行った。

キャンプ地からどこまでも延びる直線道路を行くとちょっとした小山に白い色の建物や多くの民家が見えた。そこがジーザンだと教えられた。

ジーザンは海に面し、漁港として魚のにおいが吹く風に溢れていた。人々はイエメン人や黒人が多く、たいてい薄汚い格好をしていた。彼らはスークや通りに群がって、私たちの車を珍しそうに見送った。

ジーザンのアミールはムハンマド・スデイリーという名前。

私たちはアミールのマジュリス（アラビア語で「居間」、「座る場所」の意）に通された。私たちはその中央に座り、白いゴトラ（頭巾）を被り、茶色の薄布のアバーヤ（上っ張り）を纏った男性がアミールであることがすぐ分かった。彼は威厳に満ち、いかにも高貴な顔立ち。両脇には長老たちが陣取っている。まさに江戸時代のお殿様にかしづく家来の様子。みな立派なひげをたくわえて、同じ格好をしている。ただアミールと違うのは家来のゴトラが赤い色であること。アミールはちょうど陳情にきた男に何かを聞いているところだった。男はしきりに何かを懇願している。私には男の言っていることが全く理解できなかった。かなり癖の強い方言であったかもしれない。アミールは何か一言、横の家来に言った。男はそれに対して納得してないようなそぶりで早口でまくし立てた。とその時彼の両脇に直立して長い刀を抜いてもっていた2人の護衛の兵

士が彼を制した。男はおずおずと下がらざるを得なかった。護衛兵の刀はギラギラ光り、柄の部分を除けば日本刀の大刀そのものだった。

ここではまだ王制で、王が地方を統治する場合、王の親族を統治者として地方へ派遣するのである。アミールはもともと「王子」という意味。ここでの政治の特徴としては、統治者が直に人民の意見を聞く、いわゆる「直訴」の制度がまだ行なわれていることである。

ここでも長蛇の列に並んで男たちがアミールに会うために待っていた。順番が来るとひとりひとりアミールの前に立ち、長い大げさとも見える挨拶をし、アミールの手にくすをして忠誠の言葉を捧げ、それが終わると訴えの手紙をアミールに渡した。アミールはそれにさっと一瞥し、横の家来にそれを渡し、たちどころに指示を出していく。私はあっけにと取られて見ていた。

いよいよ私の番が来てしまった。私は何だか心細かった。でもここでひるんではと思い、前に進み出た。直立不動で挨拶をした。「アッサラーム・アライクム、・・・」するとアミールは手を差し伸べて、「アフラン・ワ・サフラン」（ようこそ）と言われた。私は右手を出して握手をした。それからアミールは何に興味をもたれたのか、微笑みながら私をそばに座れと手招きをした。私は恐る恐るアミールの横に座った。私は背筋を伸ばし、両手をはっきりと体の前に合わせて置いた。手を隠しているとは何か武器のようなものを隠し持っているのではないかと疑われるのが嫌だからである。アミールはそばにいる給仕に私にコーヒーを注ぐように命じた。ひょうたん型のコーヒーポットからお猪口のような茶碗にアラビアコーヒーが注がれる。私はこのコーヒーが殊の外好きなので一気に飲み干した。このコーヒーはとびきり上等のものだ。香りが違う。ベドウィンのテントで出されるものとは大違い。私は丁重にお礼を述べた。アミールは矢継ぎ早に私にいろいろな質問をしてきた。「なぜアラビア語が話せるのか」、「何でジーザンに来たのか」、「何を望んでいるのか」等。私はこのときとばかりアラビア語を駆使し、オマル氏の書いてくれた手紙を渡し、こちらの意向を話した。アミールは静かに聴いてくれて、私のアラビア語を分かってくれたようである。私はアミールが頷いてくれているのがうれしかった。それからアミールは一言、「タイプ」（よろしい）とだけ言った。そして横の家来（書記）に命じて所轄の町村への紹介状を書くように指示したのであった。

私はアミールへ丁重にお礼を言って、お尻を向けないよう後ずさりして彼の元を離れた。私は少し待つように言われたが、30分も待たずに紹介状はタイプされ、私に渡されたのであった。大感激。

1975年12月28日

今日からジーザン・キャンプの現調の開始。私は大脇氏、山村氏とワーディー・ジーザン付近の現調に行った。

1975年12月30日

スーク・アイバーンにサブキャンプ。

ジーザンからサビヤで舗装道路を離れ、埃まみれのごつごつ道を揺られて約3時間、次第に辺りは山間地になった。遠くの雲間に2000m級の山々が見え隠れしている。

スーク・アイバーンはそこに延びているワーディーに沿って開けた小さな村だった。川には細いながら水が流れ、村人がロバに水がめを乗せ、水を汲んでいた。木や石でできた粗末な民家が川岸の高台に這いつくばるように立っている。私たちはそのアミールに挨拶をした後、その村を越えていった。そこに住んでいる人はイエメン人みたいで、みな背が低く、腰巻をし、汚らしく見えた。私たちはワーディーを遡り、支流へと進んでいく。上流に行くに従い次から次へ2, 3軒の石積みの家から成る集落が山の中腹やワーディー沿いに現われる。私たちはガイドの青年から次々とそれらの名前を聞いていった。

道々を行くと驚くかな、次から次へと見上げるばかりの高い山々が現われた。さらにそれらの尾根には数え切れないほどのたくさんの家々があるではないか。ガイドによると中腹にはいくつも集落があり、そこに行くには徒歩でしか行けないという。私たちは啞然とした。これからこの地域の現調はどうやって進めればいいのか。

1976年1月15日

スーク・アイバーンの山岳地帯のサブキャンプのためジーザンに食料を買い出しに行った。野菜スークからスーパーマーケットまで午前中汗だくになって歩き回った。

ジーザンの町は紅海に面する港町。どこからも海の碧い水平線が見える。港には大きな貨物船が停泊し、波打ち際には小さな漁船が揺れている。

港の横にある魚スークにはいろいろな種類の魚が並べられており、人でごったがえしていた。かつお、マグロ、アジ、さばのような私たちにも馴染みのある魚もある。しかし並べられている魚には蠅が黒くたかって、異臭を放っており買う気になれなかった。

1976年1月17日

いよいよスーク・アイバーンヘサブキャンプ。

キャンプ全員で自動車の入らぬ山岳地域へ攻撃をかけたわけである。

スーク・アイバーンはいくつもの山を越えた谷合にある。私たちはいくつかの班に分かれて現調することにした。別の班の連中は早々とそれぞれの持分の地域へと散っていった。私たちの班は、この付近を現調することになっていたもので、今日はここに逗留する予定。村人は私たちが行くとわっと寄って来て、私たちの尋ねる質問に熱心に答えてくれた。彼らは擦れてなくて、とても親切。私たちは一軒の家を借りて、例のごとく羊飯を食べ、わいわい騒ぎながら夜を過ごした。このワーディーには水が流れており、蛙の鳴く声も聞こえる。夜気が気持ちよい。

ここから明日私たちはファイファ山に登って現調をするのだ。聳え立つ山の中腹や頂に家々が点在している。それらを一つ一つ調べて行くのだ。

1976年1月18日

ファイファ山登山。

朝8時、スーク・アイバーンの家より車にて出発。途中ファイファ山の入り口まで車で行けた。そしてサルバという所でストップ。もうそこからは車は入らない。私たちは4頭のロバを借りて荷物を背に縛り付けた。さあ、いよいよ登山開始。

山道は石がごろごろして、つづら折に上へ上へと続いている。道の脇に所々草花が生えていて私たちの目を楽しませてくれた。目を遠くに向ける。しかし今日は霧が深い。周囲の山々は白い霧に隠されてほとんど見えない。山道はなかなか険しい。すぐ息が切れた。ロバも尻を叩かれ、叩かれようやく登っていく。私たちも時々停まって、日陰で深呼吸。所々に石で積み固められた円塔形の民家がある。私たちは喉の渇きに耐えかね、一軒の家の扉を叩き、水を飲ませてもらった。ここでは雨水を屋上に貯めて、生活水として使っているという。出された水は臭いもなく、とてもおいしかった。

私たちは午後1時半頃にスークやイマーラのある所に無事到着することができた。もう皆ぐったり。

1976年1月19日

ファイファのイマーラで歓待を受け、朝食もご馳走になった。さあいよいよ現調の開始。出口氏、徳田氏と別れ、私たちは南西方向の山へ向かった。

朝靄が一面にかかった木々の間を歩いていった。山道は、麦畑の脇を通り抜け

山の尾根に通じている。私たちは、鉄砲を担いだガイドを先頭に進む。こんな急斜面に円塔のような石積みの民家が段々畑のあちこちに建っている。まったくの驚きだ。サウジにもこのように高地があり、人が住んでいるのだ。彼らは山の斜面に畑を作って、牛や羊を飼って暮らしている。生活水はどうしているかという、かなり豊富に降る雨の水を家の屋上に作った貯水槽に貯めている。木々は日本と同じように密に茂り、バナナやコーヒーの木が植えられてあった。私たちは食料も水も寝具も持たずに出かけた。土地の人はとても親切で、「自分の家に泊まっていけ」と行く先々で引っ張りだこだったからである。私たちは、今回は地元の人の善意に甘えることにしたのである。

今夜は、一軒の粗末な家畜の糞の臭い農家に泊まらせてもらった。

1976年1月20日

昨晚は農家の円塔形の家の屋上に泊まらせてもらった。しかしそれが大間違。大変な目にあったのである。といっても別に危害を加えられたわけではない。ただ夜の寒さを軽く見ていた結果の悲劇（喜劇？）である。

私は凍え死ぬかと思った。

真夜中の3時頃であろうか。私たち（私とASD職員のラフマーンの2人）は屋上の泥塗りの床に直接横たわり、毛布一枚で寝ていたが、床のあまりの冷たさに目が覚めてしまったのである。体中ががたがた寒さで震えがとまらない。ラフマーンはまだ体を丸くしてよく眠っている。私は体中を手で擦ったりしたががたがたは止まらない。下に寝ている家の人に毛布をもらおうと思って階段の下を見たが下は真っ暗、もし女の人がそこで寝ていたらどうしよう。騒ぎを起こし、家の人たちを起こしてしまえば申し訳ないと思い、結局降りるのはやめにした。あと2時間もすれば夜が明ける。私は我慢することにした。でも寒さで震えはとまらない。私は自分の1枚の毛布もラフマーンに掛けてやり、もう寝るのは諦めた。それから下に響かないように軽く体操をしたりした。それでも歯はカチカチ鳴りつづける。こちらは湿度が低いので体感温度はより低く感じられるのかもしれない。これが長く続いたら凍え死んでしまうにちがいない。こんな寒さは初めてだ。私は、今度は座禅をした。「心頭滅却すれば火もまた涼し」の逆だ。少ししてどうにか歯のがちがちはおさまってきた。ようやく夜がすこし白んできたようだ。

5時くらいになって、ようやく下で誰かがごそごそやり始めた。それをずっと待っていたのだ。私はすぐに泥の階段を下りていった。ちょうどその家の娘が炉の中の火種を集め、その上に薪を乗せ、火を起こしているところだった。

私はすぐ火に当たらせてもらい、ようやく生きた心地が戻ってきた。手や足の指先がむずがゆく、ようやく体中にあたたかい血が通いだしてきた感じ。

下は台所だった。娘は火にやかんをかけると、次にせっせと何かをやり始めた。時々私の方をちらちら盗み見ている。空は少しずつ明るくなってきた。娘は黒のビロードの上っ張りに赤や緑の筋の入った腰巻をつけ、花模様のカーキ色のスカーフをしていて、顔はまだあどけない。少しして母親や父親も起きてきてせっせと朝の準備をしだした。母親も娘と同じ格好をしている。家族の皆は私がいまに寒そうに火のそばにしがみついているのを見て、顔を見合わせて笑っていた。

次に娘は座って台に吊るした瓢箪を平らにしたような容器をしきりに両手でゆすり始める。主人に何をしているのかと尋ねるとそれは中に入った羊の乳をバターにしているのだそうだ。（私が聞いたところが間違っていなければ。）

一方母親は湯を沸かしお茶を入れ、次にパン種を練り始めた。私はようやく体中の寒けが収まり、手足にぬくもりが出てきた。

また火のそばにいてあまり見てもよくないと思い、下へ降りていった。泥で固めた丸い外壁の内側に付けられた階段を下りていくとそこは2階で、日の光が全く入らずそこは家族の寝室であった。太い木の円柱が部屋の真ん中にあり、丸い部屋の壁に沿って4、5個の高床の寝台が並べられてある。何かかび臭い。そこに夫婦も娘さんも寝ていたのだ。

私はさらに階段を降りていった。そこは土間で、牛小屋だった。一瞬鼻につく強烈な糞の臭い。大きな体の牛が4頭、そして羊も2頭いた。家のお婆さんがせっせととうもろこしの茎を運んで牛に食べさせていた。お婆さんの格好も娘さんやお母さんと同じであったが、黒のビロードの上っ張りはいくたびも薄茶色に変わっている。

私はようやく外に出て、深呼吸をした。やはりまだ寒い。節々がだるい。辺りは段々畑が広がっていたが、今は霧に隠れて見えない。鳥の鳴き声がしきりにする。お婆さんは、今度は家の周りを掃除し始める。日本の農家と同じだ。

私はやはり寒気がするので、家に入ろうとすると暗い土間から白と茶色の牛が顔を出して私を見ているように見えた。私はそっと牛たちのそばをすり抜けて土間に入ったが牛たちは無関心に草を食んでいた。

まもなく朝食ができたらしく、私たちは呼ばれた。食事はとうもろこしの薄焼きのパン、それにつけるサマンと呼ばれる羊の脂肪の油、それに娘が作っていたバター、それにお茶であった。私は乳製品があまり好きというほどではないが、この時ばかりは食べなくては失礼と思いありがたくいただいた。同行のラフマーン氏は少し遅れて皆が食べている中に加わった。私は彼に「昨夜は寒かったか」と聞いたが、あまりピンとこないようであった。私の毛布をかけてや

ったからだとは私は言いかけたがやめた。私が寒さでのたうち回っていた時、すやすや寝ているとは。

さて、私たちはその家を後にして、またとことこと山道を歩いていった。途中でその家の主人がガイドをしてくれてついてきてくれた。有難かった。

1976年1月21日

今朝は、久しぶりにファイファ山より四方の山々がはっきり見渡せた。ワーディー・ジョーラは蛇行しながら白々と流れている。スーク・アイバーンもかすんでその岸にへばりついているように見える。遠くの山々はファイファ山と同じくらいの標高でそれぞれの頂をあらわにしていた。

ああ、私たちはこの登山でいろいろのことを学んだ。喉がからからになり、ただ一杯の水を求めてひたすら歩いた。口の中はべとべとになり、倒れそうになる疲労感を覚えた。その頂上でアミールの歓迎を受け、一杯の水を飲み干したときは何と幸福感に満たされたことか。しかし次の日もファイファ山を巡り、私はまた激しい渇きに苛まされた。

そして夜は夜とて寒さにがたがた震えて眠れなかった。その時私の欲しいものはただもう一枚の毛布であった。しかし夜が白み、火に当たったとき震えは嘘のように消え去った。ああ、人間とはこのようなのだ。このようにちょっとしたことで縛られてしまう存在なのだ。私は人間存在の弱さをしみじみ知った。ファイファ山を下りながら考えた。

1976年1月22日

皆、それぞれサブキャンプから帰り着いた。

皆それぞれの山に挑戦して、大きな戦果を持って帰ってきた。

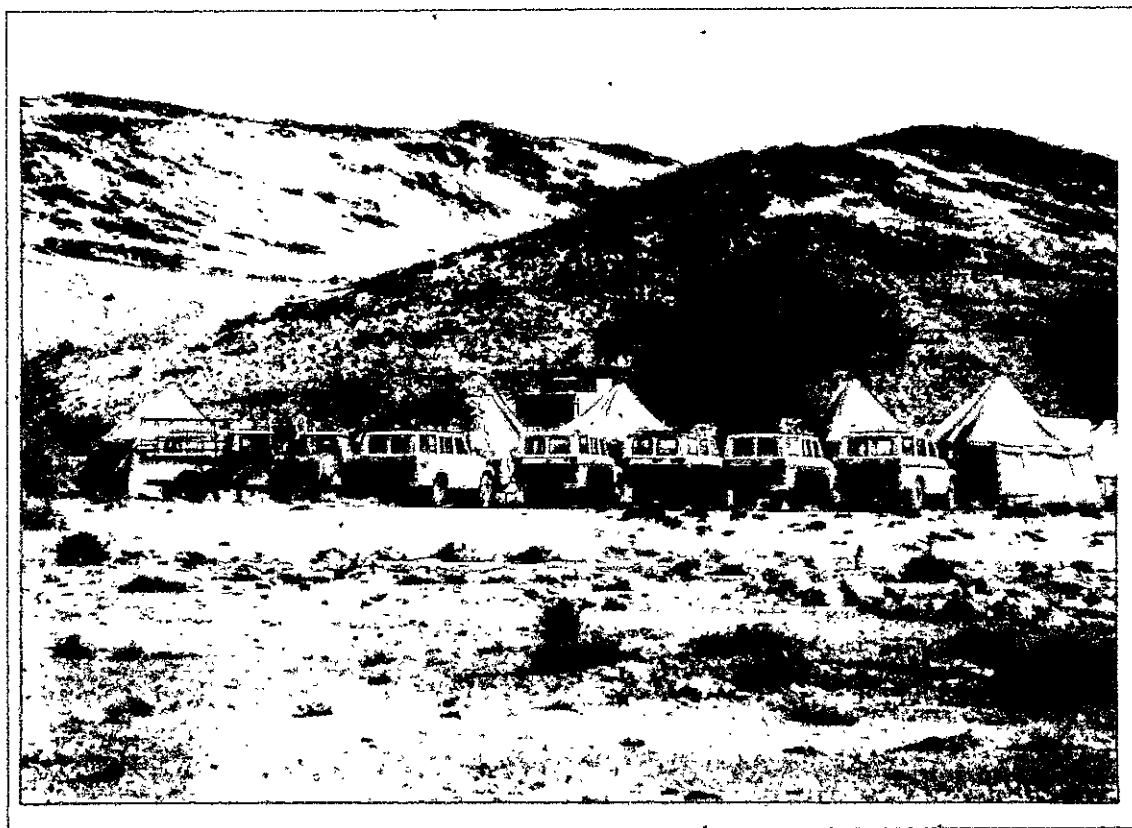
胸突き八丁の岩山に登り、ロバも上がらぬ高地まで這い登った。ぼうふらの浮いている水も飲んだ。一日中ワーディー内を歩き続けた。また土地の人からこの上ない暖かい歓迎を受けた。

皆、それぞれ一回り遅くなって帰ってきた。

時は移ろい行く。瞬間、瞬間の思い出でだけがその時の苦しみを純化して癒してくれる。今、戦いの戦士たちもつかの間の安らぎの中で眠っている。

今晚は皆で密かに作っておいたぶどう酒に皆ほろ酔い加減だった。おやすみなさい。

(写真10、ジーザンベースキャンプ)



(写真11、スーク・アイバーン)



(写真12、次のワーディー・バイシュ廻行単独徒歩現調。ラクダと2人旅)



(写真13、ハンラール、中央)



(写真14、荷物をラクダに乗せている現地人ガイド、左はハンラール)

